

Oita Yufumi

VOL.13

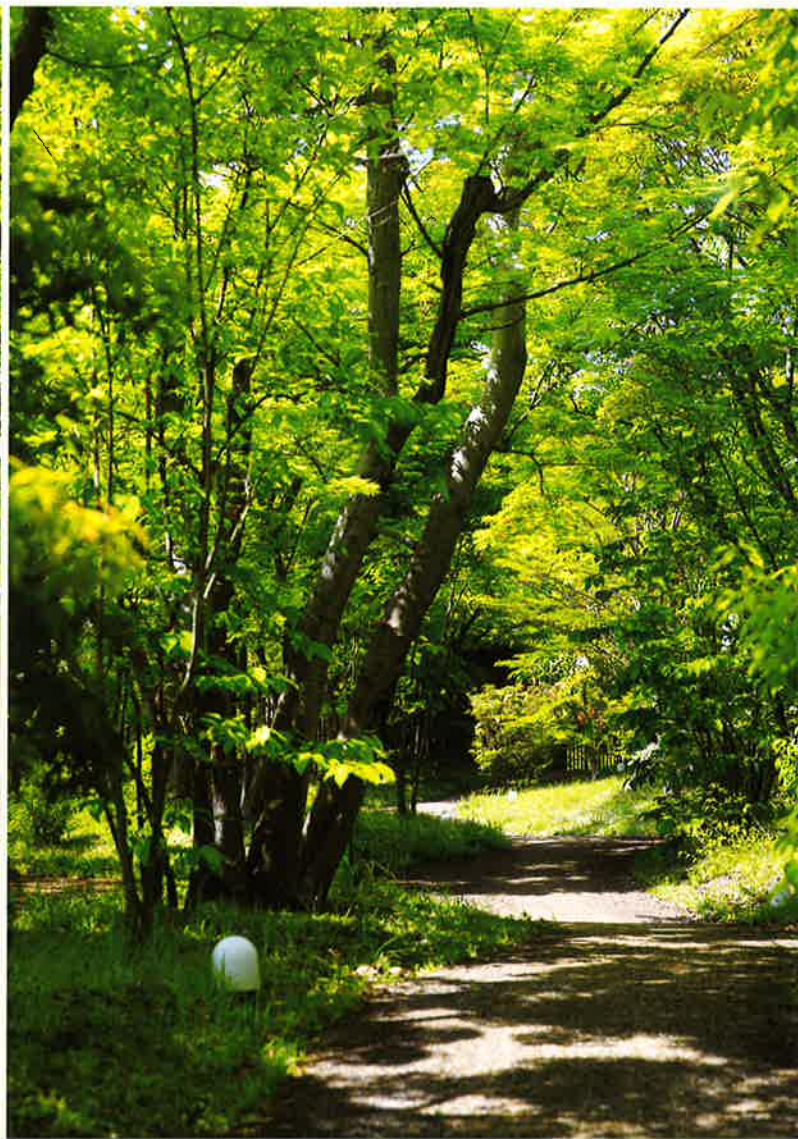
Hospital

発行/2016年4月

大分ゆふみ

病院たより

 大分ゆふみ病院



「今、求められているホスピスの役割とは」



院長 一万田 正彦
いちまた まさひこ

がん治療を行っている方、もしくは関わっている方であれば、緩和ケア・ホスピスケアという言葉は耳にされたことがあると思います。ここ最近では、高齢化社会、多死社会により、がん患者さんの対応は多用化してきており、緩和ケア・ホスピスケアは、緩和ケア病棟やホスピス病棟のみならず、一般の医療機関や在宅支援診療所によっても、緩和ケア・ホスピスケアが提供できるような体制の整備が進んでいます。それは、がんを罹った患者さんは、その方の希望に応じて、様々な形での緩和ケア・ホスピスケアを受けられることができると言えます。

それでは、緩和ケア病棟やホスピス病棟の役割とは、何でしょうか？

ここ4~5年の変化を見ますと、ホスピスに入院される方は、一般の医療機関や在宅支援診療所において、標準的な緩和治療・ケアを行っているにもかかわらず、苦痛症状や辛さがあり、症状の改善が難しい方が入院されることが増えているのが現状です。それに加えて、患者さんご本人だけでなく、そのご家族が介護のために疲れている状況を目の当たりにします。

大分ゆふみ病院は、専門的緩和ケアの提供施設ですので、そのような困難な状況に対して、専門的な知識を活かして、より細やかなその人に合った手段を用い、苦痛症状や辛さを取ることに全力を尽くし、患者さんご本人だけでなくそのご家族の心情へも十分な配慮をすることに努めています。また大分ゆふみ病院では、入院だけでなく、緩和ケア外来においても、がんに伴う苦痛症状で困っている方に専門的緩和ケアを提供しています。

緩和ケア病棟やホスピス病棟では、一般病棟に比べて余裕をもって患者さんペースで接することができます。そこで私たち病院スタッフは、患者さん・ご家族に対して、本気で寄り添う心を持って接しています。

世の中の状況が変化していく中で、専門的緩和ケアの提供施設である大分ゆふみ病院は、がん患者さんとその家族の支えとなるべく日々精進を重ねております。そして患者さん・ご家族の皆さまにとって「ここにきて良かった」と言ってもらえるような病院を目指しています。大分ゆふみ病院が、がんで苦しむ患者さんとそのご家族の支えの一助となれば幸いです。

YUFUMI

中庭



「父が伝えなかったこと」

塩月 良子



「まわりのみんなが偉かった。自分のことを思ってくれていた。俺がえらいのではない。ありがとう。人間は誰でもこんな時が来る。俺は神様でも仏様でもない、ただ一個の中山二郎。それが人生。もうスエ子や正や孫やひ孫にも会えないかもしれないが、代表して良子につたえる。ありがとう。いま自分が終活に向かっている。今日が別れの日。ずっと平行線できたけれど、どこで交わるか分かれるかはわからない。自分が安らかに眠ろうとすると、おまえがそこにいる。」

3月5日に日付が変わった頃、父は目を覚ますと静かに語り始め、この日は私にとって忘れられない日となりました。一万田先生が優しいオカリナの音色でハッピーバースデーを奏でて下さり、堺看護師長が「お父様はお元気だったら、きっとあなたのお祝をしてあげたかったと思います。だからその気持ちを私たちが代わりにお伝えしたのです。」そう言ってスタッフの皆様と私の誕生日を祝って下さいました。口を開けて歌おうとする父の姿を見て、患者だけではなく家族への温かい思いやりに感動の涙が止まりませんでした。

天気が良いので外の景色を見に行きませんかと勧められ、ベッドのまま外に出た3月9日。「ああ空がきれい。俺は広い世界の空を羽ばたいている。うれしかった。みなさんがとてもよくしてくれる。ありがたい。」と空に向かって大きく両手を広げた父の姿を思い出すと、きっと今も広い空のどこかで干の風になって見守ってくれているように感じるのです。次第に近づく終末に向かったの話を伺った時には戸惑いましたが、その日のために、父が一番輝いていた頃の大分国体のユニフォームを自宅に取りに帰り、冷静に落ち着いて父の旅立ちを迎える覚悟ができたのです。エンゼルケアを施していただいた後、思い出深い大分国体のユニフォームに身を包んだ父と再会した時には、うれしそうに微笑んでいるように見えました。膵臓がんの宣告から僅か1ヶ月後の3月12日、父は88歳という人生のゴールを早足で駆け抜けて逝きました。ゆふみで過ごしたのは11日間でしたが、食事も水も取れない父のためにシャーベットにした薬や大好きなカルピスのかき氷を作って下さったり、いつも笑顔で接して下さる皆様の温かい優しさに守られ、父は次第に穏やかな表情を浮かべるようになりました。痛みが和らいだ時、ポツリポツリと語った言葉は今でもiPhoneに残っています。その声を再生する度に涙があふれますが、父の死を目前にして何を思っていたのか、何を伝えなかったのかをしっかりと受け止めることができました。それは、私がずっとそばにいられたからではありません。一万田先生はじめスタッフの皆様が患者と家族の気持ちに常に寄り添い、痛みを和らげながら、父に残っていた生命力を最大限に引き出して下さったおかげなのです。素晴らしいホスピス大分ゆふみ病院で過ごせたことに心から感謝しています。

春



春がやって来ると、各お部屋からはそれぞれの色とりどりに包まれた庭の景色が美しく広がります。



Spring

天気の良い日にお散歩。
「太陽がまぶしいなあ」と言った笑顔が素敵でした。



ご家族と愛犬と一緒に桜の下での一枚。



キレイな娘さんの姿に少し照れていらしゃいましたね。



各お部屋から眺める庭に爽やかな風が吹き抜けます。

当院では、毎月ごとにさまざまなイベントを行い、患者さんや

四折

七夕の会。ピアノ演奏に合わせて歌いました。

患者さん手作りの和紙人形。短冊に願いを込めて。

Summer



みんなで麦わら帽子をかぶって、夏のお散歩。



夏祭りにて。射的の腕前はプロ並み!?

夏



大きく育った木々の葉が茂り、緑に包まれる夏は、散歩や夕涼みなど穏やかな時間が流れます。

月見や竹宵など、皆で楽しい時間を過ごすひととき、
景色が赤く染まり始めて秋が深まっていきます。



月見の行事では、ハーブの演奏に
合わせて歌を歌いました。



Autumn



中庭の竹灯りの小径



すてきなお菓子と
すてきな時間
きょうは楽しいお月見会



竹灯りに照らされて、
とても穏やかな気持ちになりました。

家族と共に季節を感じながら楽しい時間を過ごしています。

季
々



Winter

家族みんなでトナカイに。
笑顔に包まれました。



雪が積もれば、やっぱり雪だるま。



暖炉の灯りに心が和みます。



一緒に豆撒き。
節分にメジロンも特別参加。

ラウンジの暖炉に火が入り、コンサートやクリスマス会など
たくさんの笑顔が広がるあたたかい冬です。



Volunteer



ボランティアの仕事



大分ゆふみ病院では、患者さんが社会との関わりを持てるような環境作りも心掛けています。そのため、医師や看護師などの病院スタッフばかりでなく、多くのボランティアがホスピススタッフの一員として活動しています。現在は、約55名の方に登録していただき、月曜日から土曜日までそれぞれの個性や特技を活かしながら様々な活動を行っています。ボランティアは患者さんとご家族に寄り添いながら、家庭的な雰囲気の中で大切な1日、1日を心穏やかに過ごして頂けるように努めています。またボランティアは、病院の中に「社会の風、匂い、空気を吹き込む」という大切な役割も担っています。主な活動は、ラウンジでの喫茶やハンドマッサージの提供、また園芸、折り紙、パッチワークキルトは患者さんやご家族と一緒に行うことで、潤いを生み出す安らぎの時間となります。ほかに、ピアノやリコーダー演奏、院内の行事への参加…など、多岐に渡るボランティアスタッフの活動は、院内に“ひとときの癒し”をお届けする存在です。

ボランティアスタッフの活動を紹介します。



ラウンジでは、珈琲やお茶を提供しています。



毎日行われるピアノなどの演奏会
※写真はボランティアのリコーダー演奏



メッセージカードに素敵な挿絵を描いています。



「リレー・フォー・ライフ」には、毎年、参加しています。



ハンドマッサージは、患者さんやご家族に好評です



ラウンジで患者さんとの談笑のひととき

■ 研修・施設見学受入れ状況 (2015.4.1~2016.3.31)

研修

- 卒後臨床研修医 13名 (大分大学医学部、大分県立病院)
 看護師研修 20名 (大分県看護協会、大分大学医学部附属病院、大分赤十字病院、済生会 日田病院)
 看護学生研修 33名 (大分大学医学部看護学科)
 薬学生研修 11名 (九州保健福祉大学、崇城大学、第一薬科大学、長崎国際大学、神戸学院大学)

施設見学 60名 (ホスピスセミナー参加者含む)

医師1名、看護師31名、薬剤師2名、社会福祉士2名、理学療法士1名、介護支援専門員3名、介護福祉士3名、その他17名

大分大学医学部附属病院、大分県立病院、大分赤十字病院、アルメイダ病院、大分医療センター、新別府病院、済生会 日田病院、永富脳神経外科病院、天心堂へつぎ病院 ほか

※入院患者さん、ご家族ともに、ご迷惑をお掛けしないよう細心の注意を払っていますのでご協力をお願い致します。

■ ホスピス診療記録 (2015.4.1~2016.3.31)

■ 入院患者数

152名 (男73名、女79名)

■ 平均年齢

74歳

■ 住所分布

大分市105名、大分市外47名

(大分市外：由布市15名、竹田市5名、別府市4名、豊後大野市4名、県外4名など)

■ 紹介元病院

大分大学医学部附属病院、大分県立病院、大分赤十字病院、アルメイダ病院、大分医療センター、別府医療センター、吉川医院、山岡在宅クリニック、うえお乳腺外科、大分三愛メディカルセンター、大分中村病院、大分記念病院、大分共立病院、宇佐高田医師会病院、みえ記念病院、御手洗病院 ほか

入院までの流れ

① 入院相談

電話で入院の相談を行った後、まず患者さんの容態など現状を伺います。また、入院や見学を希望の方は、来院日時のお約束をします。

② 医師による診察面談

入院希望の方は、患者さんご本人またはご家族に対し、医師による診察と面談が行われます。また施設の見学もできます。
 ※紹介状とX線フィルムなどを持参していただきます。

③ 入院判定会議

医師、看護師長、医療ソーシャルワーカー(相談員)によって行われます。

④ 会議の入院決定の連絡

患者さんまたはご家族に入院の適否、日程について連絡をします。

⑤ 入院

相談員、または医師が患者さん、ご家族、紹介元病院と連絡を取り、入院の調整を行ないます。

病院理念

大分ゆふみ病院は

『今を生きる』患者と家族を支えます。

1. 患者と家族の権利と尊厳を守る診療・看護を実践します。
2. 心身の不快な症状の緩和につとめ、最善のケアの提供を目指します。
3. 家族の不安や悲しみが和らぐように支えます。
4. さまざまな職種とボランティアがチームを組み、ケアにあたります。
5. 大分県の緩和ケアの発展に寄与します。

ご案内

入院をお考えであったり見学をご希望される方は、
必ず電話予約をお願いいたします。

※予約をされていないと相談が重なり、対応できない場合やお待ちいただく場合がございます。

■入院の対象となる方

- 医師が治癒が期待できないと判断した悪性腫瘍の患者を対象。
- 患者と家族、またはその何れかが入院を希望していることが原則です。
- 入院時に、「病名・病状」について理解していることが望ましく、理解していない場合には、患者・家族の求めに応じて適切な説明が行われます。
- 社会的、経済的、宗教的な理由によりお断りすることはありません。

■がん疼痛緩和外来 [要予約]

がんによる痛みやしびれなどでお困りの方、また、痛みにより眠れない方など、どなたでも直接外来受診や電話相談に応じます。専門の緩和治療医が対応いたします。お気軽にご連絡ください。※要予約

■在宅を希望する方

ご自宅で生活を希望する方は、訪問診療で症状コントロールすることも可能です。必要に応じて、訪問看護、ヘルパーと連携いたします。

■講演依頼を承ります

緩和ケア・ホスピスについてわかりやすい内容で、講演活動を行っています。お気軽にご相談ください。

■ホスピスセミナーを開催しています

ホスピスケアをより多くの方に知っていただくために、ホスピスセミナーを春・秋の年2回、開催しています。詳細につきましては、ホームページをご覧ください。(http://oitayufumi.com)



まず、相談窓口へお電話ください。

☎097-548-7272

電話受付時間 / 月～金曜日 AM9:30～PM4:30(祝日は除く)

交通のご案内

- バスをご利用の場合
大分駅より大分交通<机張原>行き、
上金谷迫停留所下車。
- 車をご利用の場合
大分駅より車で15分、大分インターより車で5分